

信楽に魅せられた美の巨匠たち

Special Exhibition
Masters of Beauty
Who Were Charmed
by Shigaraki



富本憲吉

この白土を富本憲吉先生が探していられた。自磁を試作してみたかったらしい。先生の書かれたものが残っている。「宋窯そのままの形と釉をもとに、よく保存する花たてが、この村にて焼かるを聞き、一たび出来上がった形、釉が若し良きものならば、如何に永くその滋味がわれに与えるかを思い、一陶工として強き責任を感じた。信楽勅旨にて、千九百参拾参年七月」とある。先生の四十七才?の時だった。

註) 平野敏三「信楽・勅旨の神仏器」『日本美術工芸』369号 日本美術工芸社(1969)



日根野作三

戦後、日本人の生活様式は激変した。…新しい信楽は、激しくうごめいている。…企業の合理化、近代化は、松薪をたく登窯から重油窯への転換に象徴されるように、信楽の変貌は大きい。…陶業地の原始的形態と、工業都市的要素が、なんのわだかまりもなく共存する姿は、他の陶業地にみられない稀有なる光景ですらある。…信楽の人々の、もてあましたような陶器への強烈なエネルギーが、むうむうと熱っぽくたちこめているのを感じる。



熊倉順吉

註) 熊倉順吉「陶郷 信楽」『婦人之友』第62巻第7号 婦人之友社(1968)

火鉢、水瓶、手水鉢、紅鉢、植木鉢、便器、湯たんぼ、茶壺。ここで出来た茶壺は嘗ては全国の葉茶屋の店先を飾っていた。青い茶の簾葉や白や青の大きな壺がそれである。これは信楽の名誉ある勲章であったが近年全く作られなくなった。大巾の見事な便器も作られなくなった。可憐な湯たんぼも作られなくなった。茶壺の代わりに火鉢を今作っている。…支那海鼠まがいの寒い火鉢である。これも…ぼつぼつ模様物に替わろうとしている。



河井寛次郎

註) 河井寛次郎「近江の信楽」『火の誓い』朝日新聞社(1953)



濱田庄司

たまたま応接用の棚の中に、(山水)土瓶がひとつのっていました。…実は後で解りましたが、信楽に神山というところがあり、そこでできた土瓶が元の見本のようでした。その土瓶の口の所に、チョンチョンと三つばかり線が書いてあります。それは、河井寛次郎と私の考えでは、ここは一番欠けて危ない所だから、注意せよという危険信号だと…。昔はそういう模様を兼ねて、そこまで注意が届く親切と余裕があったんだと思います。



北大路魯山人

まず信楽ほど素地の荒い土は日本にない。大きな珪石粒や小さい長石の粒が無数に混入している。…鉄分が多く、焼くと備前や丹波によく似た黒褐色の肌になるものがあるが、やはり荒い珪石や長石の粒を沢山にかんでいるので、その区別がすぐにつく。…土は鉄分が少なく、ほんのりと赤くこげ、信楽ほど明るい感じのやきものはない。日本にもなく、中国、朝鮮にもない土である。荒い肌が赤くこげ、ほのぼのとした感じは信楽の魅力の第一だろう。

註) 小山富士夫「信楽大壺」『信楽大壺』中日新聞社出版局(1965)



荒川豊藏

彼等ほどのような経緯でこの地を訪れ、どのような仕事を手掛けてきたのでしょうか。本展では、近現代を代表する作家13人の作品や関連資料を紹介。彼等の信楽での足跡をだどりながら、幅広い交流のなかで育まれてきた、信楽のやきもの文化の魅力を探ります。

中世古窯以来の伝統を誇る陶郷・信楽。豊かな自然と陶土に恵まれたこの地では、焼締め陶をはじめ特色あるやきもの文化が育まれてきました。長年に亘り人々の生活を支え続けてきた伝統と、多彩な技術への興味や関心から、数多くの作家が信楽を訪れています。これまでも、国内外を問わずさまざまな作家が、この地で作陶を試みてきました。近代陶芸の巨匠として広く知られる富本憲吉や河井寛次郎、そして現代陶芸の開拓者として活躍した八木一夫や熊倉順吉。また、岡本太郎をはじめ絵画や彫刻の世界で活躍した作家たちも、信楽で作品制作に挑んできました。岡本が1970年の日本万国博覧会で手掛けた太陽の塔(黒い太陽)は、彼等のそうした活動を象徴する取り組みといえるでしょう。

松尾の古窯趾群の一基である。落盤してか、いまはすっかり穴もふさがって断層化しているが、窯壁を示す部分は、まったく古信楽そのもののおかげか、照りがあり、ビードロさへ噴き出している。写真の示す通り、載然とした風景が、妙に超現実的な、なまなましい欲望の暗示として、ぼくの眼を釘付ける。そして思わず、自身の胸の底に蟻り始めた「オブジェ」をまさぐらせるのだ。



小山富士夫

註) 八木一夫「解説 信楽の古窯趾」『日本のやきもの 信楽伊賀』淡交社(1964)

私

の仕事は、なるだけ自分の思い通りに表現出来る工程を選んで進めている。同じ作陶でも窯の中で炎によって大いに変化する窯変は、まず避けてきた。だが、その最も炎の影響によって左右される穴窯を借りた。それは私にすれば大冒険なのだが、穴窯に託したその不安と期待の入り交じった状況が、今の私の仕事に大きな揺さぶりを掛けて、さらに次の仕事へのはずみをつけてくれまいかと、内心かなり贅(ぜい)沢なことを願って始めたわけである。



八木一夫

註) 鈴木治「穴窯＝鈴木治」京都新聞 あまから時計(1988.12.10)

信

楽の静かに空けた空間には 古代からの香り高い生活の響きが生きている この焼きものも その素朴な感情 そして堅牢な味わいに 歴史の深みを感じさせる 私は紫香楽の宮の跡で 日をあびて寝ころびながら よく感動にたえぬ思いにとらわれる 時代はどんどん進展して行く この古びた窯の町も現代的生産に脱皮して行かなければならないだろう 伝統のあるところこそ難しい 町の人も勿論だが 信楽を愛する外部の人間が 一緒に力をあわせて この町の魅力を生かして行きたいものだ



岡本太郎

註) 岡本太郎「SHIGARAKI 土の秘境信楽」信楽町(1968)

私

がセラミックという素材にひかれたのは、それが風雨に耐え、戸外でもじゅうぶん保存できるという点である。私の仕事は、多くは日常性の中からモチーフをひきだしている。だから、マンホール・橋・木などが題材になる。言いかえれば、余りにも日常的になって人々がその美しさについて見落としてしまっているものを、あらためてアートとして呈示することである。素材としてのセラミックとの出会い、それはひと言でいえば「じつにたのしいもの」なのだ。



ロバート・ラウシェンバーグ

註) ロバート・ラウシェンバーグ「CERAMIC ARTS 作品集2」大塚オーミ陶業(1988)



横尾忠則

キャンパスに油絵を描くことと、セラミックアートとの決定的なちがいは、言うまでもなく「火をとす」ということだろう。いったん火という自然のちからに委ねる。計算とか推量になかった結果が出てくる。落胆もあるが、発見もある。つねにスリリングである。創造というものに必ず含まれる偶然性の一面とも言えそう。少なくとも、発色という点でセラミックはちからのある素材であることだけはたしかである。

註) 横尾忠則「CERAMIC ARTS 作品集2」大塚オーミ陶業(1988)